

I経営の重点に関わること

評価段階（A：よくできている B：概ねできている、C：あまりできていない、D：できていない）

1教育・保育目標	2重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
「笑顔あふれる 元気な子」	思いを形にしながら 新たな発見を楽しむ	子どもが夢中になって遊んでいる	遊びが続くようになり、遊びへの意欲が見られる子が多くなったと感じる一方で、遊びが見つけれられない、すぐに飽きてしまう子がいた。遊びに夢中になり、自分たちで「やってみたい」と動き出せるような姿になるために、環境の見直しを行う必要がある。	B	A	子どもたちは、遊びが続くようになり、夢中になって遊んでいるように感じられた。保育者は思いを大切につなごうとかかわっている。遊びが見つけれられない、続かない子への声掛けや、環境づくりなどの援助は	週1回行う「環境の日」で、園庭環境について全学年で話し合い、園庭環境図を作成する。（拠点づくり、物が出し入れしやすい配置、遊びのつながりなど）
		遊びの中で自分の思いを伝えたり、相手の思いに気づいたりしている	保育者が仲立ちをしたり、思いを伝え合う場を作ったりしてきたことで、自分の思いを伝えることが上手になってきた。一方で相手の思いに気づいたり、言葉を聞いたりする力が弱いと感じる子もいる。今後も子どもたちの聞く力を伸ばすことを意識し、相手に思いがあることに気付けるようなかかわりをしていきたい。	B	B	次年度も頑張ってもらいたい。保育者が目指そうとする保育への意識の高さが感じられる。	園生活は、子ども同士の直接体験ができる貴重な場であることを再認識し、子どもの心が動く働きかけを大切にしていく。（見守る、代弁する、思いの伝え方を教える、やり取りのモデルとなるなど）
		自分の思いや発見を次の遊びにつなげている	遊びを「次につなげよう」と意識した保育者は、手ごたえを感じている。子どもの興味関心を捉え、かかわりのポイントを逃さず援助することが大切であった。遊びだせない子に対する援助が十分ではない為、具体的な援助を考える必要がある。	B	B		前日の遊びの様子と保育者のかかわりを振り返り、ねらいに沿った環境づくり、保育展開ができるよう、期案、月案、週案の作成、日誌での考察を充実させる。遊びだせない子の思いを日誌でみとり、具体的な援助を考える。

II各領域に関わること							
大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
1こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	発達の連続性を考慮し、発達や経験の差を理解把握した上で、学年目標に向けて保育が進められている	クラス内での話し合いが充実してきている。一方で、各学年の保育計画について話し合う場が不十分と感じている職員もいる。会議や打ち合わせなどは、限られた時間を最大限有効に使うための工夫が必要である。	B	B	発達を考慮した保育を行っている。職員間の計画で保育のねらいや内容をどう伝え、情報共有するかは難しいが、引き続き頑張ってもらいたい。登園を渋っていた子が笑顔で登園するようになったのは評価してもよいのではないかな。	会議の日にし、時間、場所を明確にし周知する。また情報伝達体制を年度当初に書面で確認する。保育のねらいや内容がクラス内で共有できているか口頭で確認をしていく。
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	在園時間、生活リズム違いを踏まえた配慮がされ、子どもが安定した気持ちで園生活を送っている	保護者からの聞き取りや、早遅保育からの伝達を確実に行うよう職員が意識を高めたことで、個々に合わせた丁寧な対応で、行き渋っていた子が笑顔で登園するようになった。早遅保育が必要な子が増えてきている為、玩具の見直しが必要である。	B	A		疑問に思ったことはそのままにせず、保護者や職員に質問をして、確実な情報を伝達しあえるようにする。玩具の購入を検討する。
	(3)環境を通して行う教育及び保育	いろいろな体験ができる環境、選んだり試したりできる環境が整えられている	期案を立てる、ワークシート研修を取り入れるなどした結果、子どもたちの思いを読み取り、環境や援助を工夫して遊びを展開できたと感じる職員がいる。一方で、遊びがマンネリ化してしまったという反省もあった。職員全員が向上していけるような研修の在り方を考えていきたい。	B	B		環境シート（ワークシート）での考察、週1回の「環境の日」での話し合いを通して、子どもたちの興味関心や発達に合った経験ができる環境を皆で協力してつくっていく。
2安全管理・指導	(1)事故防止・防災	様々な災害を想定した訓練に取り組み、非常時の対応を身につけている	情報のアップデートを行い訓練の想定を具体的にしたこと、新たな対応の仕方を身につけようとした職員の意識が変わった。マニュアルも大切だが、その都度状況を判断し、どのように動くべきか考えられる訓練を次年度も続けていきたい。事後の反省を積み重ねていくことも大切だと感じている。	B	B	注意情報などへのアンテナを高くし、安全については日々危機管理意識を高め、今後も積み重ねてもらいたい。	職員間の連携を強化し、気づきや問題点を明確にして次の訓練に活かす為、訓練直後に各クラス担任に聞き取りを行い、組織全体としての反省をすぐに共有できるようにする。また、その都度状況判断し、一人ひとりが臨機応変に対応する意識をしっかりともつ
3保健管理・指導	(1)健康教育の充実	年齢にあった生活習慣の自立に向けて、家庭と連携を取りながら、個に合った援助をしている 食育活動を通して食への関心を高めている	子どもの興味を引き出す食育・栽培活動をしてきたことで、子どもの意識の高まりを感じている。生活習慣の自立に向け、おたより・個別の声かけ等で、家庭と足並みをそろえて指導することで、少しずつ自立が進んでいる。今後も家庭への伝え方、相談のもち方を工夫していきたい。	B	A	食育に家庭を巻き込み食への意識を高めていることは評価できる。保護者の子育ての困り感など共有できる場があっても良いのかもしれない。	子育てに悩んでいる保護者に対しては個別に声をかけ、困っていることを共有し、共に解決策を探っていく。子どもたちに身に付けさせたい生活習慣は繰り返し伝え、確認していく。保育参加会で生活の様子を動画で見せたり、保健だよりを作成したりする。
4特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	一人一人の発達や特性を理解し、生き生きと遊びや生活ができるよう、職員で共通理解し、支援している	特別支援が必要な子のための保育「トーマスの会」を月1回30分行ってきた。今年度「トーマスの会」を公開保育に取り上げたことで、職員の学びにつながり共通理解が進んだ。今後も継続した情報発信の手立てを工夫していく必要がある。	B	B	保護者との相談体制を充実させ、特別支援教育の理解を広めてもらいたい。お便りなどで、子どもの良い所だけではなく、困っていることなども掲載すると、自分の子どもだけではなくと安心する保護者がいるかもしれない。また気になる子（家庭環境の影響）への援助も続けてほしい。	強化サポート研修でのアドバイスや個別対応が必要な子の情報を職員会議で報告し、支援のポイントを具体的ににする。また、支援児の対応で困った時は担当の保育教諭に聞き、ひとり一人が情報を得る努力をしていく。
5組織運営	(1)組織体制の充実	乳児・幼児・勤務時間の違う職員も含め、園全員で連携をとり、教育保育を進めている	クラス間での伝え合いを意識する保育者が多くなり、連携が取れていると感じる職員が増えた。しかしまだ伝え合いができていないと感じる職員もいる。報告は日時を決めて確実に、各学年の保育計画に目を通すなど、個々の意識をもっと高めていく必要がある。	B	B	学びを深め、広げる為の組織体制を今後も充実させてもらいたい。学びに向かう一人ひとりの意識も高めていけるよう頑張ってもらいたい。	打合せノートはフリーの職員の動きが見えるように記入する。情報伝達の仕方を年度当初に確認する。週1回クラスリーダーが集まる「環境の日」で話された情報を、確実に他の職員に伝える。また、環境図を事務所内の見やすい場所に貼り出す。
6研 修	(1)研修体制の充実	重点目標の達成に向け、研修計画に基づいた園内研修を行っている 園外研修に積極的に参加し、個人の専門性を高めている	公開保育の取り組みは職員の大きな学びにつながっている。園外研修の学びも積極的に報告を行い、全体への学びにつなげている。今後は参加できないパート職員の学びの場の確保を工夫していきたい。	B	A		公開保育後に作成する「研修だより」は学びや課題を共有する大切な書類になるので、パート職員にも目を通すように声をかけていく。またパート職員も1回以上参加できる公開保育の方法を考えていく。園外研修での学びは会議で報告、回覧するなどして全体の学びへとつなげていく。
7教育・保育環境 整備	(1)教育・保育環境の充実	毎月の安全点検やヒヤリハットの検討を行い、常に安全な環境を心掛けている	安全点検で、危険箇所はすぐに改善できるように努めている。ヒヤリハット記入を習慣化するために毎月職員に1枚配布し、必ず提出するよう促している。毎日の打ち合わせノートに貼りつけ、皆が目を通すようにしているが、まだ周知が不十分の為、個々の意識を高める声をかけていく必要がある。	B	B	ヒヤリハットは、起こりうること、起こるかもしれないことという意識で、大きな怪我を防ぐためにも大切である。小さなことでも書いていくことをしてほしい。	ヒヤリハット記入への呼びかけを引き続き行う。ヒヤリハット記入が必要な理由も繰り返し伝えていく。
8家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	お便りやボード、ホームページなどで、園での取り組みや子どもの姿を伝えている 日々の声かけから、保護者の思いを聴いている	今年度からお便りはコドモンで配信している。保護者の中には既読にならなかったり、開いただけでしっかり見ていない方もいる。その為コドモンでお知らせがあることを掲示したり、口頭で呼びかけたりした。日々の保育の様子は玄関先のホワイトボードやコドモンのドキュメンテーション機能、連絡ノートで写真を載せて配信するようにしている。気になる子の親には個別に声をかけ普段から話しやすい雰囲気づくりをするようにしたり、面談を行ったりして保護者の思いを聞いている。	B	A	低年齢であるほど子どもからの発信は少ない。年齢が上がれば、子どもからの発信も親に受け止めてもらえるといい。コドモンを大いに活用してほしい。写真も見やすく、子どもとの会話も広がっているという声もある。	これまで使っていた玄関先の掲示用のボードを、親子の会話を増やす為の掲示板として活用する。（親子で気づいてもらいたい植物の変化、何気ない子どもの作品、お散歩で見つけたものなどを楽しく掲示する）
9近隣の学校・園との連携	(1)近隣の学校・園との連携の推進	近隣の園や小学校との公開保育や授業を通して、情報交換や交流の場を作っている	薬科こども園、清沢こども園と、西高でドングリ拾いを楽しみ、服織中央こども園とは、就学前保育を意識して小学校の校庭探検に出かけた。服織小学校へは、2月に授業を見せてもらう機会を作りたいと思っている。園長が入学式に参加することも情報交換の場になっている。次年度も公開保育を行い、また外部の公開保育や公開授業に参加させてもらい、職員同志が話しをする場を作りたい。	B	A	服織中央こども園、清沢こども園との交流を深める取り組みを積極的に行ったことは評価できる。次年度も積極的に交流の場を作ってもらいたい。	年間計画で近隣園との交流の日を調整する。事前に職員間で打合せを行い、コドモンのフェイスタйм機能、手紙のやり取りをするなどして、子ども達の印象に残る交流となるよう工夫する。
10地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	地域の様々な人との交流を通し、園ではできない経験をしている 地域の子育ての場となっている	千代さん、囲碁教室、お話し会、中学生、デイスービス、近所の方などいろいろな人とかわる楽しさを味わえるよう、まずは保育者が見本となり、笑顔でのあいさつ、言葉をお交すなどを意識していった。子どもたちも生き生きとした表情で交流を楽しむ姿が見られた。またおしゃべりサロンのお知らせを毎月、門に掲示することで、興味をもつ方が増えたように感じる。今後も園の保育を発信し、地域の方と出会う場、地域の自然を感じる機会を増やしていきたい。	A	A	近隣の園が遊びに来ることで、地域の交流の場になっていることはとても良いこと。おしゃべりサロンは、子育て中の保護者が、こども園に足を向け、知る機会になっているので、引き続き情報を発信していってもらいたい。	地域の方へ園庭開放やおしゃべりサロンを積極的に呼びかけていく。近隣の小規模園が毎週水曜日に必ず園庭に遊びに来てくれるようになったので、交流がより深まるようなアイデアを出し、提案、相談をしていく。